

初めての雌雄選別

内水面試験場 山田敦

この4月の人事異動により水産課から水産技術センター内水面試験場に異動してきました。振り返ると、入庁して城ヶ島の水産試験場（現、水産技術センター）に12年間在籍し、栽培漁業に携わり、次の県庁水産課で11年間慣れない行政事務をさせていただきました。

今回、内水面試験場でアユの担当となり、久々の現場で、11年間の丸々と太った体を絞りながら、がんばって行きたいと思います。

さて、内水面試験場の仕事の一つにアユの種苗生産用の受精卵を供給する役目があります。育てている親アユは、人工的に採卵・受精を行うため、アユの成熟期になると、親アユの雌雄判別を行います。

雄と雌は成熟が進まないの違いがないのですが、成熟してくると、雄は「サビ」と呼ばれる、体色が黒化し、表面がザラつくような感じになります。メスは尻ビレの形に違いが出てきて、切れ込みができ、表面は雄に比べ滑らかな感じになります。

他にも違いが出てきますが、素人目に一番わかりやすいのは尻ビレの切れ込みの有無を見ることになります。（写真1、写真2）

ただし、同じタイミングで成熟するわけではなく、実際にやってみると、雄？雌？ということもしばしば……。また、私自身が初めての作業ですから、効率が悪く、アユに暴れられて手から飛び出て、あたふた。何とか、初めての雌雄選別を経験できました。10月まで、さらに親の飼育と成熟状況のチェックを行い人工採卵を開始しますが、それについては、次の機会にお伝えしたいと思います。

今後ともよろしくお願いします。



魚ではない溪流の「ウオ」・・・ハコネちゃん

内水面試験場 勝呂尚之

丹沢の溪流魚調査ではイワナ、ヤマメ、カジカなどが採集されますが、魚以外にもさまざまな生き物が出現して、調査チームを楽しませてくれます。その代表が魚ではない「ウオ」・・・「サンショウウオ」です。丹沢にはハコネサンショウウオ（以下、ハコネちゃん）とヒダサンショウウオの2種が生息していますが、両種とも、環境悪化のため生息地は減少しています。

先日、とある西丹沢・酒匂川源流で調査を行ったところ、でるわ、でるわ・・・ハコネちゃんが、次々と網に入ります。ほとんどは幼生（写真1）ですが、目玉が「グリッ」としてひょうきんな顔をした大型の成体（写真2）も混じっています。幼体の方は完全に水生で、「外鰓」と呼ばれる赤い鰓を体の外に出しており（写真1）、水中から酸素を取り入れています。他方、成体は乾燥に弱いのですが、皆さんのイメージとはちょっと異なる？陸上生活を営んでおり、日中は石の下などに潜っていて、夜間に活動します。そして、夏の暑い時期と冬の寒い時期は、沢の伏流水などに潜って休眠してしまう変わり者です。

この沢はハコネちゃんが多いことで有名ですが、ほとんどが20 cmくらいの細流に生息しており、水深のある淵や水量の多い瀬にはいません。また、堰がひな壇のようにたくさんある沢なので、ハコネちゃんはその堰の直下で多く採集されます（本当は上に行きたいけど、登れないのかな？）。また、今回の調査ポイントは、イワナやヤマメがいないので、これらの魚に食べられることもなく、また、餌などで競合することもないので、本種だけがよく増え、ハコネちゃんの聖域になっているようです。

採集したハコネちゃんは測定後、生息地へと放流しますが、小さな隙間などへ潜り、よく確認しないとビクやバケツなどにへばりついたまま、試験場に連れて帰ってしまうこともあります。気温が高くと弱ってしまうし、生きた餌しか食べないので、飼育はかなり手間がかかりますが、ウルウルしたその愛くるしい眼にいやされてしまいます。

ところでこのハコネちゃんですが、最近はDNA分析などの研究が進み、数種に分けられました。ツクバハコネサンショウウオ、シコクハコネサンショウウオ・・・と言った感じですが、こうなると、もうどこのサンショウウオかわかりませんね～。しかし、丹沢や箱根のものは、今のところ、そのまま「ハコネサンショウウオ」でよいようです。

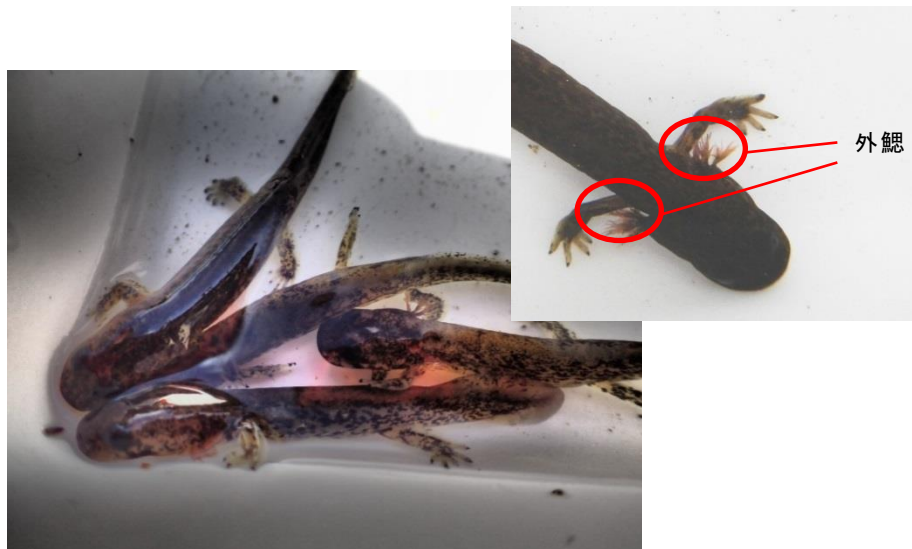


写真1 ハオネサンショウウオの幼生と外鰓



写真2 ハコネサンショウウオの成体